

甕は、ハケ目調整が認められなくなり、「く」の字口縁で胴部が球形に近くなるものが主体的である。一方、SI-132にあるような「コ」の字状の口縁に近く、胴部が長胴気味となる後出のタイプもみられるようになる。この時期の堅穴住居数は、総数15軒とⅠ期に比べて規模が小さくなる傾向がある。

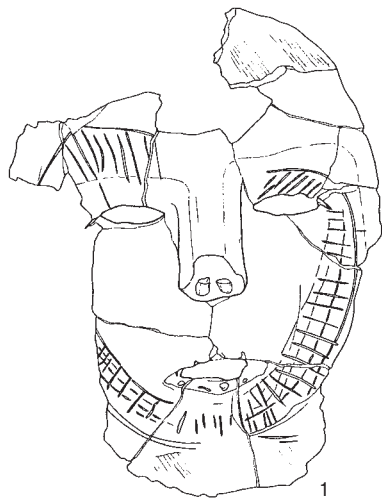
Ⅲ期は、本調査区の集落の終息時期に当たり、資料数も少ない。Ⅱ期との大きな変化は認められないが、高杯では、SI-229やSI-175のように脚部が短くなり全体的に「ハ」の字状に開くタイプが主体的となる。ただ、Ⅱ期の形態を残すSI-229やSI-021のような直線的に体部が開く杯部もみられる。杯の資料は少ないが、SI-031のような、体部が内湾し、底部が平底気味となる杯が姿を見せるようになる。甕は、Ⅱ期同様胴部に最大径を有するものがほとんどであるが、前の時期に比してやや長胴化するタイプが多くなるようである。この時期は、和泉式期の最終段階に相当しよう。

2 3号墳の年代的 위치づけと埴輪（第281図）

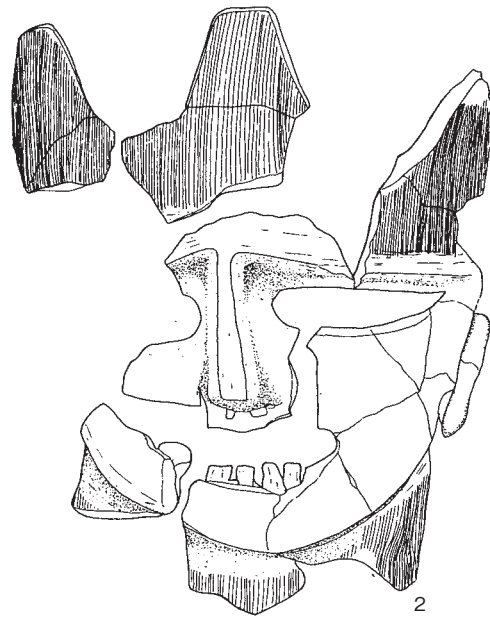
3号墳の築造年代を推測できる資料は、周溝内から出土した須恵器をはじめとする土器群と円筒埴輪群である。須恵器には、杯身と杯蓋が各2点、甕1点が周溝底面近くで検出された。杯身は、体部中位から底部にかけて丁寧なヘラケズリが施され、口縁部が長くシャープに形成される。これらの特徴から、本資料は陶邑のTK-208型式に相当する時期の所産と考えられる。甕も当該時期の特徴を有しており、この時期頃に3号墳が築造された可能性が高い。その年代は5世紀後半となろう。土師器杯には、丸底となるものの他に1点のみではあるが、いわゆる古相の模倣杯が含まれている。これらの土師器杯の年代観も須恵器とほぼ同様と思われる。この時期は、集落の終息段階から1段階新しくなる可能性があり、集落が台地上から姿を消した後に3号墳が築造されたものであろう。

一方、図示できた円筒埴輪は44個体を数える。そのほとんどが4条5段構成を採り、2条3段のものは形状の明らかな2個体以外に、4個体はその可能性を指摘できる。この円筒埴輪群の特徴としては、1次タテハケ調整のみの個体がほとんどで、この時期多く採用されるB種ヨコハケのタイプはきわめて少ない。ただ、当該時期の上総地域の円筒埴輪にはこのような状況が一般的であり、地域的な特徴として捉えられることができよう。この時期の埴輪窯としては、木更津市畑沢埴輪窯¹⁾が知られているが、この窯の円筒埴輪は3条4段構成を基本的に採用しており、3号墳の供給窯とは考えられない。3号墳と類似する4条5段の円筒埴輪は、木更津市茅野1号墳²⁾で確認されている。外面調整などの特徴は鹿島台3号墳と共通するが、突帯の形状にやや後出的の様相が窺える。畑沢埴輪窯が供給している富津市内裏塚古墳³⁾にも4条5段の円筒埴輪が認められており、4条5段の円筒埴輪を供給する埴輪窯が畑沢とは別に存在する可能性が考えられる。

一方、3号墳の周溝から、顔の部分のみであるが、人物埴輪が1点出土している。この埴輪の特徴としては、歯の表現と線刻による黥面の表現があげられる。歯の表現を施したものの類例は少ないが、高崎市山名原口Ⅱ遺跡⁴⁾の1号古墳から出土している。この古墳は現状保存を前提とした確認調査が行われ、石室は確認されないものの、墳丘径23mを囲む円墳であることが判明した。調査範囲内では、5～6体の人物埴輪が検出され、その内の1体が鼻や唇に白い石を埋め込んでおり、まさしく歯を表したものである。報告では人物埴輪として扱っている。一方、本庄市前の山古墳⁵⁾からは、いわゆる「笑う埴輪」が出土し、上下に僅かな窪みがあり、「本来存在した何らかの部品が脱落した痕跡」と推定され、さらに、「確証はないものの、石などを嵌め込み、歯を剥き出して笑う表情を表した可能性が高いと考える。」としている。



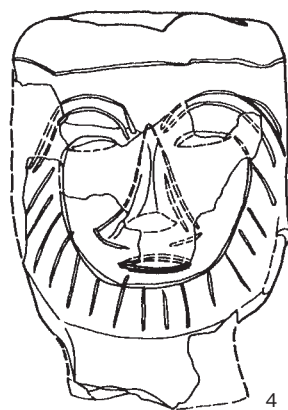
1
鹿島台3号墳



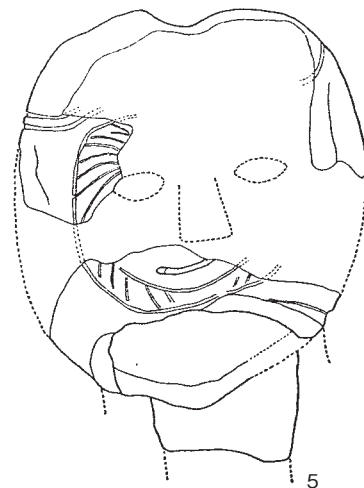
2
高崎市山名原口遺跡



3
大阪 大賀世古墳



4
大阪 大賀世古墳



5
和歌山 井辺八幡山古墳

2：歯のある埴輪（1/4）、3～5：黥面埴輪（1/3）

第281図 人物埴輪の顔

いずれの古墳も6世紀末葉頃の古墳であり、5世紀後半とされる鹿島台遺跡3号墳とは大きく時代が異なる。当該時期の歯を表現した埴輪の例は現在のところ鹿島台遺跡例が最古となろう。なお、鹿島台遺跡例は、顔面部分のみの遺存であり、明確に「楯持ち埴輪」と断定することはできないが、前の山古墳は明らかに楯持ちであり、山名原口古墳の埴輪は、人物埴輪群のなかにまわりを圧倒するような特異な表情で立てられており、楯持ちとなる可能性が高いことから、鹿島台遺跡の例も楯持ち埴輪となることが推測される。

黥面については、伊藤氏により古墳時代の黥面が集成され、関東と畿内に集中することを指摘され、黥面埴輪の描き方から6つのタイプに分類している⁶⁾。そのなかで、鹿島台遺跡例のように、顔の輪郭に沿って環状に施すタイプをB型とし、さらに鼻に翼状の線刻を加えるものをAB型としている。このように、

顔のまわりに線刻を施すタイプはほとんど畿内に集中している。伊藤氏は、このようなタイプを畿内型と称し、分布の偏在性を指摘している。このようなタイプの黥面埴輪は、東国では鹿島台3号墳例が初出と思われ、畿内産の須恵器の出土と関連して、本古墳の築造には畿内との何らかの関係が窺える。

注

- 1) 安藤鴻基 1974「千葉県木更津市畑沢埴輪窯址の調査速報」『古代』第57号 早稲田大学考古学会
萩原恭一 2004「埴輪の生産と分布」『千葉県の歴史資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』 千葉県
- 2) 齋藤礼史郎ほか 2004『茅野1号墳・金鈴塚古墳』 木更津市教育委員会
- 3) 萩原恭一 2004「埴輪の生産と分布」『千葉県の歴史資料編 考古4（遺跡・遺構・遺物）』 千葉県
- 4) 福田敬一ほか 1991『山名原口Ⅱ遺跡』 高崎市教育委員会
- 5) 太田博之 2001『旭小島古墳群 前の山古墳』 本庄市教育委員会
- 6) 伊藤 純1987「古墳時代の黥面」『季刊考古学』第20号

第4節 鹿島台遺跡の弥生時代から古墳時代の様相（総括）

今回で鹿島台遺跡全体の報告が終了するため、ここでA区～D区の弥生時代から古墳時代の集落の流れを簡単にまとめておく。

弥生時代の集落が形成されるようになる区域はB区で、その時期はいわゆる池上式期から宮ノ台式期にかけてと思われる。調査された範囲では、この段階の集落は小規模であるが、台地先端部のA区で当該期よりやや古くなる須和田式期の再埋葬が1基確認されている。B区でも竪穴住居としては認められないが、破片資料に須和田式期のものが存在していることから、台地中央部に小規模な集落、先端部に再埋葬が位置するという状況があったものと想定される。次の宮ノ台式の時期になると、集落規模が大きくなり、それに伴って環濠や方形周溝墓が営まれるようになる。竪穴住居はB区を中心にC区にも広がりを見せるようになり、台地奥部のD区にも数軒のまとまりがみられる。一方、環濠はB区のみ、方形周溝墓はA区に18基、B区に4基それぞれ認められる。出土土器をみる限り、環濠と方形周溝墓にはそれほど時期差はなく、同時に存在していたものと思われる。B区では、環濠の両側に方形周溝墓があり、墓域を分けるような意識はあまりなかった可能性があるが、A区は再埋葬の後、方形周溝墓群が密集して営まれる墓域として性格付けされたようである。次の弥生時代Ⅱ期にあたる久ヶ原式期にはさらに集落が大きくなり、Ⅰ期と同様、B区を中心に、C・D区に展開をみせている。この段階には、環濠はすでにその機能を失っており、方形周溝墓も姿を消している。Ⅲ期の山田橋式期では、B区とほぼ同様の住居数がC区に存在しており、これまでのB区中心からB・C区にまたがる広い範囲に集落が展開するような状況を呈する。

古墳時代になると、Ⅰ期は弥生時代後期同様、B・C区に広がりがみられるが、Ⅰ期の古段階はほとんどB区に集中しており、弥生時代を継承するような形で古墳時代の集落が形成されるのはB区で、後続する時期にC区に展開していったものと想定される。ところが、Ⅱ期以降になると様相がやや異なり、C・D区に集落の主体が移行しているようである。特にD区では、Ⅰ期の集落が空白となり、Ⅱ期以降に新たな展開をするようになる。時期を経るに従って、台地中央部からより奥部側に集落の営みを移していったようである。Ⅲ期に集落が台地上から姿を消すのとほぼ同時に、A区からD区の調査区全体に円墳群が築造されるようになる。古墳が営まれた期間は、Ⅲ期の最終時期と思われる5世紀後半頃から、最終的にはA区に4号墳が築造される6世紀中頃までの比較的短期間の所産となろう。